

# 第四高等学校庭球部の八高戦に関する研究 —昭和3-12年発行の『白楊』（庭球部部報）の記述から—

A historical study of the inter-school tennis club matches between the Fourth and the Eighth High School in Japan: Based on the articles of “Hakuyo”, yearbooks of the Fourth High School tennis club in Kanazawa 1928-1937

大久保英哲、松尾 鈴香  
OKUBO, Hideaki MATSUO, Suzuka

## はじめに

大正14年から始まった四高と八高の庭球部の対校戦は、昭和9年まで毎年開催された。当時の対校戦は「全校を挙げての一種の熱狂的祭典」<sup>1)</sup>であり、選手は学校の代表として母校の名誉を賭けて戦っていた。八高戦が行われていた期間、四高庭球部はインターハイなど他のどの大会よりもこの対校戦を重視し、八高戦のために一年の練習を費やしていた。チャンピオンシップが大事にされる現在では、対校戦のためにインターハイを欠場するという考え方はなかなか理解されないものであろう。しかしながら、十数年続いた八高戦は、昭和11年には廃止され、再び復活することはなかった。昭和10年の応援団の衝突事件を発端に廃止されたといわれているが、その廃止への詳細な経緯については今まで明らかにされていない。

そこで、本研究では、昭和3年から12年に第四高等学校庭球部によって発行された『白楊』<sup>2)</sup>（庭球部部報）（四高同窓会所蔵）の記述をもとに、当時、四高庭球部が最重視していた八高戦の様子と、四高庭球部側から見た八高戦廃止への経緯について明らかにすることを目的とする。



図1 『白楊』第10号（昭和12年）

## 1. 研究方法及び史料

本研究では、主な史料として第四高等学校庭球部によって発行された『白楊』（四高同窓会所蔵）

を用いる。

『白楊』は昭和3年から23年まで「第四高等学校庭球部」が毎年2月～3月（第9号のみ昭和11年4月15日）に発行した部報で、計17号発行されている。各号ともページ数は40ページ（創刊号）から115ページ（第6号）まで幅があるが、平均82ページといったところである。目次は毎号ほぼ一定しており、①白楊会会則・白楊会役員、②集合写真、③部長挨拶、④OB寄稿、⑤部誌、⑥各種試合内容・結果報告、⑦回顧、⑧白楊会会務報告・白楊会員動静、⑨編集後記、などである（図1参照）。なお、『白楊』から直接引用する場合には、旧字体や送り仮名を原文のまま用いる。

白楊会とは、第四高等学校庭球部員とそのOBで組織された会である。役員は会長1名、委員5～7名、生徒委員2名で組織されており、会長には部長が、委員は直近の卒業生が、生徒委員は現役部員の主将とマネージャーがそれぞれ就任している。

## 2. 結果・考察

### 1) 昭和2年度から11年度四高庭球部の部員数の推移

昭和2年度から11年度の部員数の推移を図2に示した。年度終わりの人数というのは、『白楊』の「現在四高庭球部関係者」の欄に掲載されている人数である。年度初めの人数というのは、年度

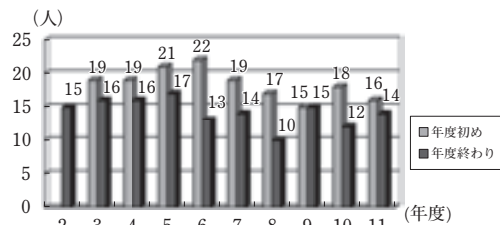


図2 昭和2年度から11年度の部員数の推移

終わりの1、2年生と、復部者、新入生を含めた数である。新入生の数は、『白楊』の「部誌」の、新入生歓迎コンパの記録に掲載されている氏名から算出した。なお、途中入部者、復部者に関しては、年度初めの人数に加える。これは、途中入部者を年度終わりのみに入れてしまうと、1年間での退部者数がわからなくなってしまうためである。留年者は留年した学年に含めて数えた。3年次に留年した場合、留年した年に現役として活動していない者は人数に数えない。また、昭和2年度の年度初めのデータは1年生の分しかないので省略する。図2からわかるように、年度初めの人数は最多で昭和6年度の22人、最少で昭和2、9年度の15人である。年度終わりは最多で昭和5年度の17人、最少で昭和8年度の10人である。

入部者に関して、3月の合格発表から4月の新入生歓迎会までひと月弱にも関わらず、1年生は毎年5～10人入部していた。四高庭球部は毎年、全国中等学校庭球大会を主催しており、この大会を絶好の勧誘の場として活かしていたのではないかと考えられる。2、3年生の時点での選手としての途中入部はなく、マネージャーかあるいは復部という形式である。マネージャーに関しては、昭和4年度を除いて、3年度から8年度は全て2年次に入部した者であった。

退部者に関しては1、2年生がほとんどであった。1年生の退部者は昭和4、9年を除いた年全てで出ており、昭和6～8年の間は新入生が毎年4、5人退部していた。2年生は昭和9、11年を除い

た年全てで退部者が出ており、特に昭和6年に4人、10年に5人と、多数の退部者が出ていた。3年次で退部する者は少なく、昭和3、7、11年のみで人数も1、2人であった。

復部者は、昭和4、7年に1人ずつ、11年に2人いた。留年者は、現役部員では昭和4、8、11年に1人ずついた。また、3年次に留年した現役でない部員は、昭和5、10年に1人、6年に2人いた。

表1 四高庭球部の年間スケジュール（昭和2-11年度）

月	日	事項
4	1	学年開始
	上旬	第一学期授業開始
	中旬	新入部員歓迎会
		北辰会各部紹介
	下旬	北辰会予算編成、査定
5	下旬～6月上旬	関東・関西遠征
6	上旬、中旬	金沢三校リーグ
	上旬	八高戦協定
	下旬～7月上旬	第一学期試験
7	上旬～大会直前	夏季合宿
	上旬	選手戴推式
	中旬	八高戦
		インターハイ
	下旬	全国中等学校庭球大会
8	下旬～9月上旬	秋季合宿
9	上旬	第二学期授業開始
		役職引継、新チーム会合
		北辰会戦績報告会
	下旬	紅白戦
10	上旬、中旬	北陸関西トーナメント
	下旬	校内庭球大会
	下旬、11月上旬	練習打ち、塾記念コンパ
12	中旬～下旬	第二学期試験
1	上旬	第三学期授業開始
	中旬	三年生送別会
	中旬～2月上旬	冬季練習
2	中旬	北辰会功労賞授与式
	下旬～3月上旬	学年試験
3	上旬	卒業式
	中旬	入学試験
	下旬～4月上旬	春季合宿

## 2) 年間スケジュール

昭和2年度から11年度の四高庭球部の年間スケジュールをまとめたのが表1である。年によっては天候不良のために大会が延期・中止になったり、経済的理由から合宿先が変わったりしていることがある。また、遠征先が関東・関西のいずれかであることや、八高戦延長によりインターハイに出られなかった年があること、昭和11年度には八高戦がなくなったことなど、年によって僅かな違いは見られるものの、全体として見れば年間スケジュールはほぼ固定しており、それほど大きな変化は見られない。

## 3) 四高のテニス

四高庭球部では、技術よりも精神面を重視していた。大正12年四高庭球部が軟球から硬球採用に踏み切った際、三高出身でテニス経験者であった栗原廣道教授（修身・哲学、1922-1941在職）が部長に就任し、以後長くその指導に当たっている。栗原氏が理想とした精神は、「和致祥（わちしょう）」、「斃死後已（へいしごい）の奮闘的精神」、「清明心」であった。

「和致祥」は「和は幸運をもたらす」という意味である。部員の一致団結を目指し、四高庭球部のモットーとして長年受け継がれていた。「斃死後已の奮闘的精神」は、部員にわかりやすいよう「頑張りのテニス」と言い換えられている。「頑張りのテニス」こそが四高伝統のテニスであり、精神的訓練によって得られるこのプレースタイルは、技量をも凌駕すると考えられていた。部員は全身痙攣でコートに倒れてしまうなど身体的限界を迎えるまで、決して弱音を吐くことなく戦っていた。「清明心」とは清く明るい心のことである。

栗原氏はこの三つの精神は三位一体でなければならないと考え、以下のように述べている。

「和が實現され各部員の氣合がしつくり合つて、初めて部全体が愉快に朗なる奮闘努力を續けることが出來、皆が飽くまで緊張して頑張る所に和も明さも生出され、部内の空氣を常に明るく自己の心を清く保とうとする所には自ら人の和も奮闘心も生ずる筈」（昭和8年第3号p.6）

氏は、清明心こそ根底にあるべきだが、これらは相互的に効果を表すものであり、いずれかが欠けていてはならないと指摘している。

これらの精神は部内においてだけでなく、当時の社会においても重要な要素であった。旧制高等学校卒業後、彼らは日本の将来を担う立場になる。社会において指導的立場に立つ場合、自らがこれらの精神をよく理解し、集団に喚起できたならば、集団をまとめることができる。また、軍国主義のこの時代においては国民の一致団結が重視されており、一国民としてこれらの精神を備えていることは、国としても非常に重要なことだったといえる。そういった意味でも技術面だけではなく、むしろ精神面に注力した栗原氏の指導方針には、当時の時代精神、そして旧制高等学校に求められていた人格形成要素を満たそうとしたものであった。

## 4) 四高庭球部の八高戦

### ①八高戦の開始

硬球採用以降初の対校戦である八高戦を行うことになった経緯に関しては、次の記述がみられ

る。

「六百圓内外という部費もこちらに言はすれば出来ぬところをも辛抱してやつてゐるのだと云へるのだが、これをも門外漢から言はすれば庭球部は北辰會費を喰ひ過ぎるといふ顔をせぬ。文句云ふなど出て了へばそれ迄だが多少辛い思もあつたものです。どこかと試合でもして勝たねばとはお互部員同士が當時毎日の繰言。到々大正十三年夏名古屋へ練習マッチと云ふ名義で出かけて行つて八高を破つた。」（昭和3年創刊号p.11）

「創業の第一ヵ年を何の目標もなく、ひたすら基礎練習をつゞけたのであつたが、此の努力の結晶をあらはすべき何物か対象物を求めんと此處に對八高定期戦の出現を見るに至つたのである。」（昭和5年第3号p.3）

硬球採用以降、対外試合を行わずにひたすら基礎練習に励んでいた四高庭球部の部員達にとって、八高戦は自らの実力を試す場であり、北辰会において認められるためにも重要な存在であった。大正13年からの開始を目指して交渉していたが、四高当局の反対によりこの年は非公式に行わざるを得なかった（昭和5年第3号p.3、伊庭一夫）とされている。また対戦相手を八高とした理由は、野球部が八高との定期対校戦を行っていた先例になつたものようである。この四高と八高の野球部間の定期対校戦は大正11年6月3日、八高の挑戦状に對し「挙行以て貴校の挑戦に應ず」という応戦状送つたのが始まりで、その後、両校校長間の公文書交換を経て、対校戦に関する約定が成立した<sup>3)</sup>（p.436）。また、競技部は大正15年に八高競技部から「野球、庭球とともに陸上競技の対校戦も行ないたい」との挑戦状を受取り、これを承諾、この年から八高戦を開始している<sup>3)</sup>（p.506）。八高戦は野球・庭球・陸上部の、いわゆる野外三部による学校を挙げての公式の対校戦であり、開始時期は異なるものの、年を重ねるにつれ熱を増していった。

## ②大正14年から昭和9年の庭球八高戦

大正14年から昭和10年までの四高対八高庭球部の戦績をまとめたのが表2である。

大正14、15年の八高戦は、四高が勝利したが、昭和2年は初の敗北を喫した。翌3年は再び勝利し、昭和4年には7-2で大勝した。またこの年、四高庭球部は東大主催の第1回全国高等学校庭球大会に出場し、優勝を果たしている。翌5年は四高軍が理想的な状態であったにもかかわらず、八高軍もかなり強く、3-6で敗れた。昭和6年の八高戦は雨天延期となつたため、インターハイと日にちが重なってしまった。野球部はインターハイを優先したが、庭球部は八高戦を優先し、7-2で勝利した。インターハイより八高戦を優先する姿からも、当時の四高庭球部において、どれほど八高戦が重視されていたかが窺える。

昭和7年には、部の不統一が表面化した。この年の八高戦は5-4で勝利したものの、OBたちからは、「奇勝」だと酷評されている。

翌8年は、八高戦始まって以来最も部員が少ない年で、補欠がおらず、退部者に試合に出てもらうほどであった。また、時習寮のチフス流行により、八高戦は応援団なしで行われた。部の状態も芳しくなく、この年は1-8で惨敗を喫した。

昭和9年になつても部の不統一は改善されなかった。これは、当時年々厳しくなる軍事教練への反発が四高生たちに広がって四高生全体の意気が低下し、この傾向が庭球部にも広まって部員間に軋轢が生じたためであるとされている。この年は八高戦始まって以来初めて零敗を喫した。

表2 大正14年から昭和9年の対八高戦戦績

年	結果
大正14年	勝利 5-4 (ダブルス2-1、シングルス3-3)
大正15年	勝利 5-4 (ダブルス2-1、シングルス3-3)
昭和2年	敗北 4-5 (ダブルス1-2、シングルス3-3)
昭和3年	勝利 5-4 (ダブルス2-1、シングルス3-3)
昭和4年	勝利 7-2 (ダブルス2-1、シングルス3-3) [ママ]
昭和5年	敗北 3-6 (ダブルス1-2、シングルス2-4)
昭和6年	勝利 7-2 (ダブルス3-0、シングルス4-2)
昭和7年	勝利 5-4 (ダブルス1-2、シングルス4-2)
昭和8年	敗北 1-8 (ダブルス0-3、シングルス1-5)
昭和9年	敗北 0-9 (ダブルス0-3、シングルス0-6)
昭和10年	中止 0-3 (ダブルス0-3、シングルス中止)

### ③昭和10年八高戦の中止

昭和10年の八高戦は、初日のダブルスで全敗を喫した。翌7月13日は雨天のため、シングルスは延期となった。一方、雨の中で行われた陸上競技の試合では両校応援団による衝突事件が起こった。これは翌14日になっても解決せず、学校当局の命令により、庭球試合はなお延期となった。ようやく交渉がまとまり、14日夜に野球戦が再開されたが、この野球戦でまたも衝突が起こってしまった。両校当局はこの年は挙行不能と判断し、遂に中止となった。この結末に関して、部長や部員は以下のように述べている。

「対校戦は端なくも応援団の紛擾を起し、遂に中止のやむなきに至り、庭球部もダブルスを終った丈で贏輪（えいゆ）を決せずに別れたのは、呉れ呉れも残念の至であつた。」（昭和11年第9号p.1 部長 栗原廣道）

「肝腎の戦は御承知の如き結末を告げあれ程充滿した私のファイトもどこへやら去つてしまった。私達のプランの結果が表はるべき八高戦だつたがその結果は部員の前に展開されなかつた。…運命の幸、不幸か玉碎の私達の現實の姿がその一部を見せたに過ぎなかつた。勿論勝負は彼の勝を認めた。」（昭和11年第9号p.11 3年主将 葛西進）

「かくて待ちに待つた対校戦、雪辱の意氣に燃ゆる一戦は三-〇負け超しの儘挽回の機を明年仙石原の戦に逸し去つた。」（昭和11年第9号p.18 3年マネージャー 三輪正五郎）

連敗の雪辱を晴らすべく臨んだ試合は、勝敗を決することができないまま負け越しで終わってしまった。そして、部員達は納得できぬ思いを抱きながらインターハイに出発した。



#### ④昭和11年八高戦の中止

昭和11年の八高戦は八高側の一方的な対校戦中止の申し出により中止へと向かって行った。その経緯を『白楊』（昭和11年第9号pp.24-26 部員 森川幸二「南下戦中止について」）は次のように述べる。

【1月9日】

この日、突如八高より「校友会豫算會議切迫のため、本年度の對校戦は中止の方針を以て進むことに決定したから御諒承を乞ふ」との手紙が届く。八高側の一方的な対校戦中止の申し立てである。これに関して、栗原部長を含め部員一同で今後の方針について協議を行った。その結果、「對校戦は出来る限り存続させたく若し不可能なる場合は對部戦として行ひたい」と決定した。

【1月16日】

長岡・金崎生徒主事、三部長、応援団、三部代表で会合を行い、各部長、各代表より八高に対して意向を尋ねることに決まった。

【1月23日】

八高から「理由は校長の申した通り」とのみ書かれた三部連名の手紙が届く。この日行われた会合では、八高各部からの手紙を待ち、その間に各部の意向について話し合いを行うことと決定し、散会した。この日の夜、部で話し合いをしたところ、「八高が四高を翻弄するときは對校戦中止も已むなし」という意見も出た。

【1月24日】

八高庭球部より、「インターハイ舉行後種々な面倒も起こり亦生徒減少による經濟上の影響につき此の際慎重協議が必要なるも豫算編成の時の時日逼迫の爲並びに我が校運動部と當局との關係よりして本校の案に賛意を表しましたが、明年度に於ても何等かの形式にて長き美しき此の舊交を暖めたいと思ひます」という手紙が届く。

【1月27日】

関係教授、三部代表で会合を行い、各部ならびに応援団への手紙が紹介された。野球部・競技部からの手紙の内容は庭球部とほぼ同一のものであった。また、八高の応援団長からは「此の話しは當局の獨斷によるものにして、應援團としては昨年水に流して解決した事よりしても存続させたく常局と均衡するから宜しく」との内容が書かれていた。協議の結果、応援団・各部代表が名古屋へ行くべきだという結論に至り、八高側に了承を得る手紙を長岡教授より出してもらうことに決定した。

【1月30日】

応援団長が単独で八高生徒主事・応援団と会見を行い、その結果を発表した。八高応援団は予算編成が一週間後に迫り、本年挙行に対しては諦めの態度を示しているとのことであった。また、八高生徒主事によると、今回の八高戦中止に関する協議は八高側の予算編成逼迫によって起こったものとされていたが、実は八高校長が「対校戦が当初の目的と外れているため、協議を行うように」と申し出たことが本来の理由であったという。なぜ四高側には予算編成が理由として伝えられたかということ、八高生徒主事が八高校長の意向を確認することができなかったため、四高に対して予算編成上の都合と説明したのである。このように八高戦に関しては、四高と八高の校長間で意思疎通ができていなかったため、両者で話し合いを行うことになった。京都・東京における2、3回にわたる会合の末、両者ともこの年の対校戦中止の意向はないとの結論に達し、校長から対校戦挙行の手紙を出してもらうことに決定して散会した。

【2月11日】

八高主事が来沢し、関係教授、応援団とともに会合を行った。種々の話し合いが行われたものの、結局何の結論も得られなかった。なおその際、八高側は、四高の意志を八高校長に伝えておくのと約束した。しかしながらその後、八高側から何の手紙も来ず、結局昭和11年の八高戦は中止にせざるを得なくなった。以上が昭和11年八高戦中止の経緯である。これに関して、栗原部長は以下のように苦言を呈している。

「八高方より今後の對校戦存続方につき悲観的意見の申出ありたるやに聞きに及ぶのであるが、當方よりは本年度八高を金沢へ迎へ立派に戦ひ得る用意ある旨を明に通知したこともあるから、當方の意向不明とは思はれないが、豫算編成期切迫を理由として所謂爆弾的通告をなし、當方の學校生徒共に存続の意向を表明せしにも拘らず、依然初志を貫徹せし八高方の態度には、聊か腑に落ちない點がないわけでもない。昨夏の失敗に頓挫して又立つ能はずと笑はれても仕方がない。試合は相手なしには成立するものではないから、遺憾ながら本年度は中止の方針を以て進む外はないのである。」(昭和11年第9号p.2 部長 栗原廣道)

八高の態度に憤りを隠せない様子が窺える。また、過去11回に及ぶ八高戦に関して、次のように振り返っている。

「十年にも餘る長い間、部員がこの一戦を目標に如何に努力し、如何に励ましあつたか、如何にこの一戦が部員の技倆練磨に拍車を加へ、如何に之が部内の統一を鞏固(きょうこ)にし打ちて一丸となる團体的精神の養成に役立つたか顧る時、對校戦は如何ほど尊い精神的訓練を與へ、如何ほど深い體驗を味はせたであらう。恐らく各部員の心に終生忘るゝ能はざる深き印象を刻みつけてゐることは疑ない。今年に至りこの意義深い試合を中止することは、部として差當り目標を失ひ聊か氣拔けの感がないではない。然し我部の理想は各人相和し、イデーとしてのテニスを實現することにある。部内に萌出づる若き生命の力は、必ずや自己實現の機會を把え相手を選び、悉く之を征服することによりてその理想を實現することである。若き部員の奮起を希望する次第である。」(昭和11年第9号p.2 部長 栗原廣道)

また、OBである内藤氏は、現役に対して以下の文を寄せ、八高戦存続を切望した。

「現役諸君へ御願ひ!!と言ふのは萬が一にも對校戦廃止の運命に遇ふ事なき様努力して下さい。…對校戦を續ける事を望むのは第一諸君の爲でもありませうが、又私に取つて、對校戦を見る事は美しくも亦樂しかりし高校生活を偲ぶ追想の現實なのだからです。此の點の魅力にかられ私は一生涯夏近付きて南下軍の聲聞けば出来る限りの努力をはらつて暇を作り金澤に行く事のみを考へるのせう。よく帝大に入ると母校の友で集つて他高校の者との交際をしない傾向があると言はれるが(私自身は轉科を志して變態的生活を送つて腰掛主義であるので解り兼ねますが)この點對校戦をやつて來た経験者は餘程救はれると思ひます。」(昭和11年第9号pp.5-6 昭和10年卒 内藤啓一)

内藤氏の記述から、栗原氏が言うようにOBにとって八高戦は生涯忘れることのない存在となっていたことがわかる。



## ⑤八高戦廃止の経緯

昭和11年7月頃から、四高では八高戦再開のための活動が活発になった。その活動は四高生だけでなく、帝大在学中の両校OBも関わっていた。当時の八高当局は、「生徒の意見をほとんど受け入れない」状況で、八高生が対校戦復活を望んでも、OBの力添え無くしてそれを実現するのは困難であると考えられたためであった。だが、そうした活動も実を結ぶことはなく、結果的には廃止へ至ったのである。時間を追ってその経緯を見ておこう。

【7月下旬】

庭球・野球・陸上競技の三部OBと応援団OBで会合を行った。話し合いの結果、「対校戦存続について配慮してほしい」という旨の書状を四高校長に各々提出するようにと決まった。

【9月下旬】

この頃、四高の生徒代表が八高生徒を訪れた。この話し合いにより両校の関係も改善に向かった。そして、これを機に「対校戦を復活せよ」という雰囲気は、両校生徒及びOB間で一層広まり、いよいよ運動は本格的になってきた。応援団・三部学生・OBでの協議の結果、各部が八高在京のOBと話し合いをし、その部の意向を確かめて報告し合うことに決まった。

【10月2日】

帝大前パラダイスにおいて、八高庭球部OBと四高庭球部OBの会合が開かれた。八高側の出席者は川崎舎、松田、尾之内、後藤、祖父江の諸氏で、四高側は小倉氏、呉比氏の二名であった。昼食を喫しながら、互いに部先輩の動静を語り合った。食事後、四高側より、「八高OBは対校戦に関してどのように考えているか」と切り出した。八高側は、OB間での連絡がなされていないし、現役部員の意向も確かめなければならないということを前提の上、次の三項を八高OBの意向として表示した。

- 一、対校戦存続賛成。
- 一、対校戦廃止の場合も對部戦を爲す希望あり。
- 一、部長宛存続に付き懇願状提出。

こうして会合は対立することなく無事終わり、再会を約束して散会した。

また同日、本郷、田村グリルにおいて、庭球部OB・陸上部OB・応援団OBで会合を行い、八高各部OBとの話し合いの結果を報告しあった。この時、野球部は不参加であった。結局この会合は報告会に過ぎず、八高側との会合の際に改めて対策を協議することとなり、散会した。

【10月8日】

小石川植物園にて四高同窓会東京支部大会が開かれた。小松校長が出席されたため、これを機会にと、散会後に三部OB・応援団OBが八高戦に対する意向を伺った。話が中断されながらも、おおよその校長の意向を推察し得る程度で終了した。

【10月12日】

本郷、明治製菓3階において、四高及び八高の三部OB・応援団OBで会合が行れた。長時間にわたる話し合いの末、在京のOBより両校長に対して懇願書を提出することに決まった。その理由は、八高当局が生徒の意見をほとんど顧慮しないという慣習があったからである。つまり、八高当局に対して、現役部員の意見だけでなくOBの意見を開示する必要があったのである。その文面は次のようなものであった。

「對校戦存続ニ付キ其ノ後何ラノ進捗ヲ見ズ、我等在京學生先輩ハ兩校生徒ノ存続ニ對スル純眞ナル熱意在ルヲ見、座視スルニ忍ビズ、一堂ニ會シ、茲ニ従前通りノ對校戦ヲ存続セランコトヲ懇

願ス。

四高八高應援團先輩團連盟」

【10月上旬】

八高当局から、四高当局宛に「従前の如く限定せられたる時日と場所に於て、統一ある組織の下に對校戦を舉行する事には拘束壓迫を感ずるを以て、新たに各部間の自由協定に基く新形式を以て行ひたい」という手紙が届く。これは、八高側が應援団の衝突事件を考慮した結果である。八高校長が「對校戦が当初の目的から外れている」と指摘したのは、この應援団の行為によるものであり、これを改善しなければ、試合を行うことはできないと判断したと考えられる。これに対して、四高側は「統一ある総合的對校戦を希望する事は勿論だが、交渉の活路開拓のため八高当局の意を受け入れ、かつ、できるだけ對校戦の本質を失うことのない様努力する」という方針を確認した。

【10月16日】

四高庭球部OBに、四高現役庭球部員から對校戦問題に関する書状が届いた。

【10月末】

八高各部代表が来沢し、具体的な話し合いを行った。庭球部においては、四高側は従来どおり7月中旬を、八高側は7月下旬（30、31日）を主張し、意見の対立を生じた。八高側が7月下旬案を提示したのは、専らインターハイとの関係であった。そのため、インターハイへの障害を十分緩和できる条件付で7月中旬案を強調したところ、八高代表は個人的意見として四高案に賛成した。そして、両校マネージャーの名において「七月中旬を原則とす」と協定を取り交わした。八高マネージャーは中旬案通過に全力を尽くすと誓い、非常に真摯な態度であったとされる。この各部代表による会合では、競技部のみ話し合いがまとまった。話し合いの後に開かれた歓迎コンパは非常に穏やかで、とりわけ應援団関係者は衝突当時の内幕を曝け出し、談笑するほどであった。こうして、再び對校戦が行われることを両校各部が期して散会した。

【11月16日】

長岡生徒主事が上京するとのことで、庭球部の意向を確認し、在京OBの意見を聞くこととなった。

【11月12日】

本郷、江知勝において、長岡生徒主事と三部OB・應援団OBで会合が持たれた。主事の先生より昨年9月から現在に至るまでの経過の説明があり、應援団6名、競技部4名、野球部2名、庭球部1名から各自質問と報告があった。しかし、結局問題は應援団と野球部にあるとのことで、庭球部としては関与できず、ただ聞いているだけであった。

またこの日、四高現役庭球部員から改めて詳細な報告と部の意向を知らせる書状がOBに届いた。以後は、八高側の意向と行動により對校戦が存続されるか否かが決まることになった。

【11月上旬】

八高應援団から、「野球部を除き庭球競技の二部は中旬に決定」という手紙が届き、對校戦継続に四高庭球部一同歓喜した。しかしながら、その後八高庭球部より「現部員一同は中旬案に賛意を表したが部長及び先輩の大反対に依り再轉して飽く迄七月下旬を固執する」という手紙が届いた。その理由は、八高側のインターハイ第一主義であった。四高庭球部側としては、インターハイ第一主義を容認するものの、7月下旬案は受け入れがたいものであった。なぜなら、毎年四高主催で行われている全国中等学校庭球大会が7月下旬であるため、この時期に對校戦を舉行することは四高にとって不可能だったからである。このように一度まとまりかけた話し合いも、八高庭球部長・OBの大反対により、再び暗礁に乗り上げてしまった。

【12月中旬】

栗原部長が7月下旬案の理由の詳細を問うため、八高庭球部長に直接手紙を送った。八高庭球部長の回答は次の通りであった。

「毎年インターハイに優勝し得る實力を有する我部としては、インターハイを第一とする故に、その期日以前に對校戦を行ひ部員を疲勞せしむる如き不利なる立場を一掃したい。従つて八高としては七月下旬案を飽くまで固執する」

これは八高庭球部長の意見であり、八高庭球部の総合的意見ではないということが、後の四高と八高の部員間の話で明らかになっているが、八高部長からの侮辱ともとれる手紙に対して、四高側は憤りを隠せなかった。そして、この手紙に対し、栗原部長は次のように返信した。

「對校戦第一とは十數年來一貫せる兩校の主義であり、殊に我部はインターハイに優勝し得る實力を有すると自信せる年にも、十九日まで御地に留つて試合を終了し、インターハイを犠牲にした事實もある。貴部は毎年インターハイに優勝し得る實力を有すると稱せらるゝが、對校戦勝敗の數より見るも之は最近の御事情であり、又之が永久性ありや疑しい。かゝる一時的事情を根據として貴部の御都合のみにより十數年來我部の示し來れる好意をも友誼をも捨てゝ顧みないやうな非紳士的態度を採る貴部と交渉するを快としないから、之を以て一切の協定を打切る」

これが栗原部長から八高庭球部長に送った最後の手紙であり、庭球部における八高戦協定は事実上、この手紙をもって決裂した。

【12月24日】

この日、四高では八高戦に関する最後の会合が開かれた。庭球部だけでなく野球部の協定も暗礁に乗り上げており、競技部はまとまったものの、他の二部がやらないのならばやめるとの意向を示した。そして、四高当局ならびに生徒側の満場一致により、四高側で對校戦廃止の方針が決定した。年末には四高校長から八高宛に交渉打切状が発せられ、十數年間行われていた八高戦に遂に終止符が打たれた。

このようにして、大正14年から行われていた歴史ある八高戦は終焉を迎えたのである。硬球採用時に部長に就任した栗原氏は、第一回八高戦の時からこの對校戦を見守ってきたことになる。この間ずっと、八高戦勝利のために庭球部に尽力してきたということもあり、彼にとって八高戦は非常に思い入れの強いものであった。

また、同様に現役部員にとっても、卒業したOBにとっても、その存在の大きさは計り知れないものであった。八高戦の廃止によって昭和12年からは、四高庭球部は本格的にインターハイ第一主義へと方針転換することとなったのである。部長・部員・OBは次のように記し、翌年の四高庭球部の活躍を期している。

「硬球になつてからの部の歴史の中心を流れてゐるものは對八高戦であり、部員全体が之を目標に働いてゐたとも考へられる。この部を支配してゐたメインイベントを失ひ一時氣拔けの感なきにしもあらずだが、我等の若人達は之に落膽することなく、更に大きく天下の覇を目指して努力することだらう。理念としてのテニスを實現してくれるだらうと期待してゐる」(昭

和12年第10号p.2 部長 栗原廣道)

「今や對校戦既に亡く永年の目標を失ふ事は非常な空虚感を感じるのですが、此處に一層結合を堅くし、和致祥のモットーを高揚して新しき理想に向つて邁進せん事を期待するのであります。」(昭和12年第10号p.97 2年 薄井康夫)

「あの對抗戦も中止となれば聊か氣拔けの感なきにしも非ずですが、部の本来の目的の達成に努力せられる様切望致します。」(昭和12年第10号p.30 OB 三杉寅之助)

「諸君が全国の覇を望むなら、八高戦の有無如何に拘らず八高は諸君の仮想敵となる。「打倒八高」これが諸君の手近な目標として打立てられるべきであらう。」(昭和12年第10号p.59 昭和11年卒 三輪正五郎)

## 結論

四高庭球部は八高と大正13年に非公式に試合を行い、約定が成立した大正14年からは定期對校戦である八高戦を始めた。八高戦は野外三部による学校を挙げての公式の對校戦であり、開始時期は異なるものの、年を重ねるにつれ熱を増していくものであった。

昭和10年の八高戦で応援団による衝突事件が起こり、兩校本部の判断でこの年は中止となった。

昭和11年には「本年は八高戦を中止したい」と八高側からの一方的な申し出がなされた。兩校校長間で会合し、話し合いの上では對校戦挙行となったにも関わらず、その後八高側から挑戦状がくることはなく、結局この年も中止となった。

昭和11年7月頃から、八高戦再開のための活動が活発になった。兩校の三部・応援団OBは従来の形式で對校戦を行なうよう、兩校校長に申し入れた。しかしながら八高当局が「對部戦という新形式で對校戦を行ないたい」との意向を示し、結局四高側がこれを受け入れたため、兩校の各部間で交渉を行うことになった。對部戦について、四高庭球部は従来どおり7月中旬を希望したが、八高側が「インターハイ第一主義」という庭球部長・OBの意向によって7月下旬案を提示したため、交渉は難航した。そして、遂には四高庭球部長が「一時的事情で十数年来の友好関係を捨てるならば、協定は打ち切る」との意向を示し、庭球部間の交渉は決裂した。そして、その後の四高の会合で對校戦廃止の方針が決定し、交渉打切状が発せられて八高戦は廃止となった。そして、四高庭球部も「インターハイ第一主義」に転換したのであった。

このように對校戦での衝突を機に、對校戦形式から對部戦への変更によって騒擾を回避したい学校当局の思惑が根底にあったことは間違いない。加えて、四高と八高の庭球部の氣質の違いも見られる。

いみじくも旧制高等学校研究者高山右近は四高と八高の氣質の違いを次のように述べる。「對八高戦に於て兩校の特質は遺憾なく發揮されて居る觀がある。鈍重、愚直、粗野、不規律、之四高選手を象徴し、敏捷、狡猾、粋、節度八高選手を物語るもの」「悠揚迫らぬ四高生と比べて、小賢しき抜目なき処が多分に現はれる」<sup>4)</sup> (pp.624-625)。對校試合の信義重視にこだわる四高と徐々に力量をつけて全国インターハイの頂点を狙う八高庭球部の姿勢の違いは、スポーツによる違いだけではなく、同じ近代スポーツであるテニスであってもそれを受容した学校や地域によって異なるス

スポーツ文化を生み出したことの好例であるだろう。

#### 【引用・参考文献】

- 1) 高橋佐門（昭和53年）『旧制高等学校研究 校風・寮歌論編』昭和出版p.343
- 2) 庭球部報（四高同窓会所蔵）
  - ・ 第四高等学校庭球部『庭球部部報創刊号』（昭和3年3月5日）
  - ・ 第四高等学校庭球部『庭球部部報第2号』（昭和4年3月1日）
  - ・ 第四高等学校庭球部『庭球部部報第3号』（昭和5年3月1日）
  - ・ 第四高等学校庭球部『庭球部部報第4号』（昭和6年2月15日）
  - ・ 第四高等学校庭球部『白楊第5号』（昭和7年3月5日）
  - ・ 第四高等学校庭球部『白楊第6号』（昭和8年3月15日）
  - ・ 第四高等学校庭球部『白楊第7号』（昭和9年3月15日）
  - ・ 第四高等学校庭球部『白楊第8号』（昭和10年2月27日）
  - ・ 第四高等学校庭球部『白楊第9号』（昭和11年4月15日）
  - ・ 第四高等学校庭球部『白楊第10号』（昭和12年2月25日）
- 3) 作道好男・江藤武人（編）（昭和47年）『北の都に秋たけて』、財界評論新社
- 4) 高山秋月「高校の特色」『旧制高等学校資料保存会（1981、1985訂正発行）『旧制高等学校全書 第四巻 校風編』所収、pp.624-625

#### 付記

本研究は、松尾鈴香「旧制第四高等学校庭球部の八高戦に関する研究」（平成22年度卒業論文・金沢大学教育学部スポーツ科学課程）に大久保英哲が加筆修正したものである。『白楊』（四高同窓会所蔵）の閲覧に際しては、四高同窓会ならびに金沢大学資料館の協力をいただいた。記して謝意を申しあげる。